

茨木市立郡山小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和5年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

- ①言葉の特徴や使い方に関する事項 概ね良好な結果であった
- ②情報の扱い方に関する事項 課題が残る結果であった
- ③話すこと・聞くこと 課題が残る結果であった
- ④書くこと 概ね良好な結果であった
- ⑤読むこと やや課題が残る結果であった

(問題形式)

- ①選択式 やや課題が残る結果であった
- ②短答式 やや課題が残る結果であった
- ③記述式 課題が残る結果であった

(無解答率)

課題が残る結果であった

- (その他) 正答率の高かった設問 1三 (送り仮名に注意して、漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる。)
- 正答率の低かった設問 1二 (図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる。)
- 無解答率の高かった設問 3二 (目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる。)
- 無解答率の低かった設問 1三 (送り仮名に注意して、漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる。)

分析

・領域ごとに分析すると、「書くこと」に関しては概ね良好な結果であった。たとえば、1二【川村さんの文章の空欄に学校の米作りの問題点と解決方法を書く。】の設問では、全国平均に近い正答率を示しており、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができている。本校が授業づくりの中で取り入れている、作文指導の成果と考える。

・また、特に「話すこと・聞くこと」の領域に関しては課題が残る結果となった。たとえば、3二【寺田さんと山本さんが、どのような思いでボランティアを続けているのかについて、分かったことをまとめて書く。】の設問は、正答率が最も低く、目的や意図に応じて自分の意見をまとめる、分かったことを言語化することに課題があることが原因だと考えられる。

・問題形式から分析すると、文章をまとめて書く記述式に課題が残る結果となった。目的や意図に応じて自分の意見をまとめる、分かったことを言語化することに課題があると考えられる。

○●算数●○

(領域ごと)

- | | |
|----------|-------------|
| ① 数と計算 | 課題が残る結果であった |
| ② 図形 | 課題が残る結果であった |
| ③ 変化と関係 | 課題が残る結果であった |
| ④ データの活用 | 課題が残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|-------------|
| ① 選択式 | 課題が残る結果であった |
| ② 短答式 | 課題が残る結果であった |
| ③ 記述式 | 課題が残る結果であった |

(無解答率) 課題が残る結果であった

(その他) 正答率の高かった設問 1(1) (伴って変わる二つの数量について、表から変化の特徴を読み取り、表の中の知りたい数を求めることができるかどうかをみる。)

正答率の低かった設問 2(4) (高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大きさを判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるか同化をみる。)

無解答率の高かった設問 4(3) (示された棒グラフと、複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み、見いだした違いを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる。)

無解答率の低かった設問 1(1) (伴って変わる二つの数量について、表から変化の特徴を読み取り、表の中の知りたい数を求めることができるかどうかをみる。)

分析

・全体的に課題が残る結果であったが、その中でも領域ごとに分析すると、「図形」に関しては正答率が高い部分がみられた。たとえば、2(2)【テープを折ったり切ったりしてできた四角形の名前を書く】の設問では、正方形の意味や性質について理解することができている。この設問では、図形の基礎基本の定着を図るとともに、実物を操作する時間を取ることが理解に結びついたと考えられる。

・また、「数と計算」に関しては、特に課題が残る結果であった。たとえば、【 $66 \div 3$ の筆算の仕方を説明した図を基に、筆算の商の十の位にあたる式を選ぶ。】という設問では(2位数) \div (1位数)の筆算について、図を基に、各段階の商の意味を考えることが理解しにくく、課題がみられた。そのため、わり算の筆算の学習の時に、位ごとに割っていく手順とともにその意味をpushしながら学習を進めていくことにする。

・また、問題形式で分析すると、記述式の設問が特に課題の残る結果となった。とくに、2(4)テープを直線で切った2つの三角形の面積の大きさについて分かることを選び、選んだわけを書く設問は正答率が最も低い結果となっている。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

【国語】正答率は前回 R4 年度を下回った。
→「書くこと」の正答率が昨年度に比べて良好となり、「話すこと・聞くこと」の領域の正答率が昨年度を大きく下回り、課題が残る結果となった。

【算数】正答率は前回 R4 年度を下回った。図形領域が比較的良好である。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

【低位層】前回 R4 年度から増加した。

【高位層】前回 R4 年度から減少した。

【全体】R4 年度に比べると、低位層、高位層ともに増える結果となっている。全体として、各年度ごとに正答率のばらつきが大きく、充てんして取り組んでいる「話すこと・聞くこと」が全体を引き上げていくと取り組んできたが、今年度、非常にその分野の正答率が悪かったことと、全体の正答率も下がっていたことから、観点を見つめなおす必要性を感じる。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

【現状の取組み】

- ・聴き合い、学び合う子どもたちを育てるために、授業づくりを研究し、ペア、グループ学習などで友だちの意見を聴く、自分の考えを表現するなどの力をつけている。
- ・校内授業研を低中高から公開し、学校全体で取り組む授業のあり方、方向性を共有し、子どもたちにつけたい力や普段の授業力向上に生かしている。
- ・授業後の研究会では、ビデオの授業検証、全員発言、ふりかえりシートの活用によって、教職員全員の学びを全体に広げ、一人ひとりの教材づくりや子どもをつなぐ視点などを養っている。
- ・3校合同授業研（2小1中）で同じ視点で授業づくりを行う。それぞれの授業づくりに参加し、3校の学びを深め、広げていく。子どもたちの学習環境に大きなギャップがないように努めている。
- ・豊川ネットワークの学力保障委員会でも月に1回顔を合わせて、保幼小中連携を密にし、それぞれの取組みを交流し、情報共有を行っている。実態把握と課題の共有をし、共通実践を模索している。
- ・放課後の学びルーム、パンダ教室、なかよし教室における個別の課題に対応した取組みを毎日行うことで、学力低位層の底上げや学習内容の定着を図っている。
- ・全校縦割り学習である「こおりやニャンタイム」の中で、課題の大きい問題を出題していく。

【今年度の学力テストの分析から】

算数は正答率が最も低かった問題で、理由として・書かれている数字をそのまま使ってしまう。数として表されていないものをどう表すかがわからなかった。条件は3つであるが、1つ目の条件の中に2つの条件があるため、満たせていなかった。ページをまたいでいるため、条件に気づけない。などの理由が考えられる。そこで、必要な力をつけていくための取組みとして、タブレットで図形変形の仕方を考えたり、実際に三角を手に取り考える経験をする。理由を書く練習をする。交流により、言葉にして伝えることができるようになってきているため、言葉から文字に書く練習をする。たくさんある数（情報）から、必要な数を見つける練習をする。条件を使った問題を解く問題や、ページをめくって探す練習をする、などを授業の中や朝学習、モジュールで取り組んでいく。また、本校で取り組んできているショートストーリー、こおりやにゃんタイムでもこれらの観点を考慮する。

国語は正答率が最も低かった問題で、そうなった理由は、問題を読んでいない、読むことが難しい、前の条件から、文章や問題を考えられていない、などが考えられる。必要な力をつけていくための取組みとして、短い文章の読み取り問題に取り組む。自分の考えを書く経験も増やす。友だちの意見に賛同しているだけの児童がいざ自分の意見を求められると、書けない児童も四分の一程度いる。「なぜ？→だから」定型を教える。条件付きの問題に取り組む。授業などの毎回のふりかえりで、「100文字以内で書く」など文字数を指定して書く練習をする。さらに、必要な条件を伝え合ったり、文章にする経験をする。といったものを授業の中や朝学習、モジュールで取り組んでいく。また、算数と同様に本校で取り組んできているショートストーリー、こおりやにゃんタイムでもこれらの観点を取組む。